

2019
1/31

数々のM&A(合併・買収)で拡大してきたネット証券大手のマネックグループ。社長の松本大(55)がポロポロになったコインチェック(東京・渋谷)に手をさしのべたのは、宴(うたげ)の後始末だけではない。36億円という対価を払っても困り込みなかったのは、仮想通貨に可能性を感じたからだ。

一個人的には(仮想通貨を使った資金調達手段である)ICO(イニシャル・コイン・オファリング)に興味がありま

す」。1月11日、仮想通貨交換業の登録が出た後の記者会見でコインチェック前社長の和田晃一良(28)は仮想通貨の未来に言及した。実はこの一言が松本にとって重い意味を持っていた。

和田は仮想通貨の中核技術ブロックチェーンの

コインチェックは死なず 再びともった起業家魂



買収発表時に記者会見するマネックグループの松本社長(左)とコインチェックの和田前社長(18年4月)

信筆者。見据えた未来は海外送金、個人間送金の「決済」だけではなかった。証券市場でしかなし得なかった資金調達の世界でも同じうねりを起こしたいと夢見ていた。

仮に和田の構想が実現すれば、既存の証券市場の存在を否定しかねない。松本はそこに気付いたからこそ、コインチェック、とりわけ和田を取り込もうとした。

出合いは2015年「えっ、こんな簡単に取引できるの?」。松本大と和田の出合いは2015年春だった。ネット金融ベンチャーの先輩である松本を和田は挨拶に訪れていた。アプリを操作してコインチェックのサービスを説明すると、松本は興味津々。和田は好印象を抱いた。

「何かお手伝いするかどうかあったら連絡ください

い」。コインチェックが0億円を集めた。仮想通貨「NEM(ネム)」を流出させた直後、松本は和田に秋波を送る。和田の頭によみがえったのが、自分が開発したサービスを評価してくれた松本の姿。松本に頭を下げ、マネックスの子会社になることを決めた。

松本は和田と出会った時点で仮想通貨の事業化に取り組みなかつたことを後悔していた。「起業家、金融人として気付くのが遅かった。全く知らないものではなかったのに……」。松本にとって

仮想通貨の未来を見誤ったのは「失敗だった」。企業が発行した仮想通貨を投資家に売却して資金を調達するICOは17年に急拡大した。米ベンチャーのグロウンスは数年で10億円強の調達に成功。スイスではスタートアップが過去最大規模の30

割強が「詐欺」を含む不正からみだ。日本の仮想通貨交換業者テックビュー一口は17年にICOで約109億円を調達。昨年9月に別の仮想通貨の不正流出を起し、それが原因で身売りに追い込まれた。ICOで調達したお金がどこに行っただけは数(やぶ)の中だ。

ブロックチェーンを使えば多数の人から多額のお金を瞬時に集められる。一方、詐欺や犯罪の温床にもなる現状ではICOは証券市場で存在感を示せない。松本が和田と感じた仮想通貨の可能性。だが成功が保証されているわけではない。

敬称略 (坂部能生)

記事の全文を電子版スロリー「仮想通貨のミライ」に掲載しています。